

現代短歌分類辭典

別名現代短歌總索引

第二十一卷

津端 修 編纂

津 端 修 編 纂

現代短歌分類辭典

第二十一卷

現代短歌分類

21

限定版1,000部の内

No.

昭和四十三年二月二十三日発行 定価四五〇円

著者発行
兼印刷者
津 端 修

発行所
東京都中野区上高田二丁目九の一六
津 端 修

振替 東京六七三三一番
電話 三八七局八四二九番
郵便番号 一六四

あたり⑩
 あたりいったい
 あたりがたし
 あたりーき
 あたりーきたれーり
 あたりきーつ
 あたりきーぬ
 あたりくる
 あたりくれーば
 あたりーける①
 〃②
 〃③
 〃④
 あたりーけれーば
 あたりこーし

目

歌数

二八九

一 一 一 一 一 一 三 三 二 二 一 一 一 一

次

頁数

一 二五 〃 〃 〃 〃 二七 〃 〃 二六 〃 〃 〃 〃 一
 あたりこーし②
 あたりーし①
 〃②
 〃③
 あたりーそ
 あたりそこら
 あたりそめーつ
 あたりーたり①
 〃②
 〃③
 あたりーたる①
 〃②
 あたりーつ
 あたりーつつ①
 〃②

(歌数三一五〇首)

歌数

一 三 一 一 一 一 一 一 七 一 一 一 二 一 一 四

頁数

一六 元 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃

あたれーば②
 〃 ③
 あたれーり①
 〃 ②
 あたれーりーや
 あたれーる①
 〃 ②
 〃 ③
 〃 ④
 〃 ⑤
 あたれーるーならーむ
 あだろしあら
 亜炭
 あだんげみち
 あち
 アーチ

一 一 五 一 七 一 一 一 一 一 四 二七 一 一 二七 二 三

〃 〃 一〇六 〃 〃 一〇五 〃 〃 〃 一〇四 一〇三 一〇二 〃 一〇〇 九六 〃 七
 あちきなく
 あちきなけれーど
 あちきなき
 あちきなかりーき
 あちきなからーむ
 あちきなう
 あちから
 味鴨
 安治川
 あちいろごろも
 鰻網
 〃 ⑤
 〃 ④
 〃 ③
 〃 ②
 味①
 鰻

二 四三 七八 一 一 二 一 三 二 一 一 六 六 七 一 一六三 六
 一三六 一三三 一三六 〃 〃 一三五 一三四 〃 〃 一三三 〃 一三三 〃 一三七 一〇六

あぢきなけれーば	一	一七	味付	一	一七
あぢきなさ	一九	〃	味ははーず	一	〃
あぢきなし①	三七	一五	味はっーて	三	〃
〃②	二三	一四	あぢはひ〔名詞〕①	二〇	〃
あぢきな	一	〃	〔名詞〕②	二六	一五
あぢきなーや	二	〃	〔動詞〕①	一	一六
あぢこち	三二	一四	〔動詞〕②	一	〃
鱈刺	一	一四	あぢはひーき	一	〃
紫陽花	二七	〃	あぢはひーし	三	〃
あぢさゐ色	三	一七	あぢはひす	一	一五
あぢさゐ小道	一	〃	あぢはひーて①	一	〃
味しーて	一	〃	②	四	〃
味す	一	一七	味ひ直す	一	一八
阿治須岐	一	〃	味ひーにーけり①	一	〃
味耜高彦根	一	〃	〃②	一	〃
味する	一	〃	味はひーぬ①	二	〃
鱈つり舟	一	〃	味ひーぬ	二	〃

熱う②
 〃 ③
 〃 ④
 圧延
 圧延機
 厚白粉
 厚面
 厚織物
 軋音(あつおん)
 暑かつた
 厚賀の里
 あつかひ
 あつかひがたき
 あつかひーて
 あつかひにくく
 あつかひやすき
 あつかふ①

一 一 一 一 二 三 一 一 一 一 一 二 一 二 一 一 二

〃 〃 一六 〃 〃 〃 一七 〃 〃 〃 〃 一六 〃 〃 〃 〃 一五 〃 〃 九四
 暑からーぬーなり
 あづからーぬ
 熱からーぬ
 暑からーなくーに
 暑からーで
 あづからーず
 暑からーず
 厚ガラス
 あづからーしめよ
 暑からし
 暑からし
 〃 ②
 あつかへーる①
 〃 ⑥
 〃 ⑤
 〃 ④
 〃 ③
 〃 ②

一 三 二 二 一 七 五 一 一 五 一 一 三 一 二 二 一

〃 〃 二四 〃 二五 二五 〃 〃 二五 〃 〃 〃 二〇 〃 〃 一九 一九

暑からーむ	二四	二四	預りーつ	一	二五
厚からーむ①	一	二六	暑がりーつつ	一	〃
〃②	一	二七	暑がりーて	二	〃
暑からーん	一	〃	あづかりーて	四	〃
暑かり	四	〃	暑がりーにーけり	一	二六
あづかり	一	二八	預りゆきーぬ	一	〃
あづかりーうーべくーば	一	〃	あづかりるーにーけん	一	〃
あづかりーえーた	一	〃	熱かる	一	〃
あづかりがたき	一	〃	暑がる	一	〃
暑かりーき	六	〃	あづかる①	二	二七
暑かりーけれーば	二	二九	〃②	四	〃
暑かりーし	三八	〃	あづかるーべき	一	二八
篤かりーし	一	二三	あづかれーる	三	〃
あづかりーし	八	〃	暑き①	八〇〇	〃
暑かりーしーかな	三	三四	〃②	一〇〇	二五
熱かりーしーかも	一	〃	〃③	一一五	二四
あづかりしらーじ	一	〃	合計	一五六	
			三、		

あたり⑩【名詞】

ノモンハン日ソ停戦協定のニュース映画みて出づればあたりいちめんの秋風⑪前田夕暮
海苔粗朶のあたりを過ぎて帆をあげし舟がたちまち遠くなりゆく 長倉智恵雄

海苔乾すと立てならべたる箕のあたり梅の匂ひはやがて流れむ

依田 秋 圃

「梅花断」かなでし妹等がしじら裳を曳きけむあたり芽草うすけき⑧

安 江 不 空

豊明殿もとの玉座のあたりかも天皇陛下芝に立ちます⑭

尾 上 柴 舟

迫撃砲のあたりに落つるはげしさに身の置きどころなき思なり③

鈴木清太郎

爆発は空に湯柱のたぎりたちあたり夏山みな枯れしとぞ②

鹿 兎 島 寿 蔵

葉桜のあたりを去らぬ熊蜂の近寄る蜂を追ひ撃つを見つ①

鹿 兎 島 寿 蔵

峠路の霜のあたりの群薄重機関銃の音ぞとどろく

宮 柊 二

橋掛をい^{はしがかり}でくる見れば二の松のあたりに暗し青衣女人^{しやういのによにん}

宮 柊 二

橋の脚見えてあたりに風立てる堤の草の底にわれ居ぬ⑫

與謝野晶子

あたり⑩

あたり⑩

はしりゆく雲さへしげしはこね山ふもとのあたり雨やふるらむ

落合直文

長谷寺の近きあたりに家を得て何に澄み入る此秋を君⑭

與謝野寛

畑隈に石を組みたる噴気孔あたり乾きてその音澄めり②

鹿児島寿藏

はちすばのあをみただよふしのばずのあたりをゆけどしるひともなし⑦

安江不空

八王子と思ふあたりの低空はただ暗し遠き桑原のうへ③

長谷川銀作

発動機の糲摺の音日は既に入りてあたりの暗くなれるに⑥

岡麓

花いばら薫るあたりに取る匙の露ふきこぼす春風もなし②

大和田建樹

花すぎし藤のあたりに近づきて夜明けむとする庭を出でたり④

村田利明

花すすきそよぐあたりの雲間よりもれいづる月の影さやかなり①

米倉久子

花のあたりほそき滝する谷を見ぬ長谷の御寺の有明の月④

與謝野晶子

花野原われのあたりにたそがれて黄に大いなる月のぼりたり

柴生田稔

埴鈴のほろこほろぎ夜もすがら枕の下のあたりにて鳴く④

若山喜志子

馬場先に波だつ濠は青く沍えつつあたりが暮れしときに見えをり①

佐藤佐太郎

馬場先のみ濠のあたりおぼほしく浅間の山の灰降りにけり①

山口茂吉

齒舞^{ははまひ}のあたりの浜かさびさびとあるばかりにて崖か砂か岩か

橋本徳寿

早川が狭間を出でて富士川にそそぐあたりの河原遠く見ゆ

半田良平

早川へ俵石山の細流のそそぐあたりの鳩色もみぢ⑩

與謝野晶子

腹にひびき四辺の空氣閃めかす格納庫内のプロペラの音⑤

若山喜志子

春風もつめたく吹くは白蘭の花のあたりに黄なる香焚く⑩

與謝野晶子

はるかなる海空と思ふあたりより来る明りありて月見草咲く

山下陸奥

春の雲乳のあたりのやはらかき肉置^{ししおき}の上におく手のたゆき①

近藤元

春の日にきらめき流る里川のかくるるあたり立つ松のむれ⑨

中村憲吉

春はやく落つる樹の葉のたまるあたり音するばかり光さしたり⑥

鹿児島寿蔵

哈爾浜のあたりの空は黄にあかり雪降りし野に鵲くだる⑧

斎藤茂吉

あたり⑩

あたり⑩

はろはろと石路に生ふる虎杖の青きがあたり雲這ひのぼる

村上成之

ひいやりと腰のあたりがなにものにか触れしがごとくくづる冥想
冷えてくる額のあたりに灯をともし和むところに夕べはをりぬ

若山牧水
町田佐朶子

ひがし山青蓮院のあたりよりも色の日の歩みくるかな⑪

與謝野晶子

低き田につづける藪のあたりよりうぐひすきこゆ夕日沈みて⑫

鹿兒島寿藏

ひぐらしが辺りを払ふ声に啼き仙郷樓へ道帰るかな⑬

與謝野晶子

日昏るればよべと同じきあたりにて管虫くだむしなけり庭の草むら⑭

大塚政光

久方の月夜さやけく天の川流るるあたり空高くみゆ⑮

蕨 檀堂

人あまたキャンプのあたりにうごく見ゆあし原の中をいそげる影も

下村海南

ひと筋に海に波立つあたりより川に入り来る汽船ふねむきなほる⑯

竹尾忠吉

ひとつ星ひかるあたりや佐渡ならむかく思ひつつ海越すわれは

吉井 勇

人びとは泉のありと谷へ下りぬともし火うごくあたり木深し⑰

鹿兒島寿藏

ひともとの桜しだるるあたりのみ小雨あかみぬ山の笹原⑭

與謝野 寛

灯のある家灯のなき家を見つつ行き全けく暮れぬ森のあたりに

伊藤左千夫

日の沈む立田のあなた高安のあたりに思ふ人もあれかし④

尾上 柴舟

灯の見えぬあたりと人の教ふなりあはれ千手の涙を忘れじ②①

與謝野 晶子

向日葵の幹を刈り退けこすもすの根もとのあたり広らになしつ⑥

尾山 篤二郎

紐太き元三大師堂の鈴の音あたりの露をはらふに似たり⑧

尾山 篤二郎

冷やかに君をうち見て頬のあたりすこし瘦せたる外は思はず

平出 修

比良山の裾曲ながるる夏がすみ藤樹書院はあのあたりかも①

橘 宗利

ひるながらあたりをぐらし窓あけて流るる山の霧はゆゆしも

長谷川 銀作

ひる日浴び真向ひに下る安藤坂親しきうときあたりの家々

土屋 文明

昼行きし砂湯のあたりにともれるはこの野に見ゆる一つの灯なり⑤

川田 順

深き靄あたりをこめて見ゆるものは篠懸の梢に懸かる珠果のみ

宇都野 研

あたり⑩

あたり⑩

落の臺いづるあたりの荒れ土のほのかに春の気をあげにけり

ふくかぜに我身をなさばひさかたのつきのあたりに雲はあらせじ

ふくらめる乳ぶさのあたり光線のうるはしくして描きがたしも

茯苓ふくりようを煮ては食すともただびとの吾があたりには雲もおこらず⑧

富士が嶺のあたりなるらん綿雲のい群れて光る霞の中に①

富士の裾の青草原となるあたり空ひくくかかる淡き昼の月②

伏拝ふしをがみ越え来てひろふ日のあたりこれよりいよ奥のほそみち

舞台より吹き通り来る風寒く声あげ笑ふ吾があたりにて②

ふた側の線路せばまりゆくあたり杉葉がいたく刈られずにより

二筋に麦圧されありこのあたり昨夜は砲車の通りたるらし③

淵の波つづききはまるあたりより朝の雨霰山蒸して立つ⑬

船の灯があたりの波をそむるあり暮れては更に海はうつくし①

金子 薫 園

三条 西季 知

鹿兒島 寿藏

安江 不空

竹添 履信

小宮 良太郎

北原 白秋

近藤 芳美

早川 幾忠

真柴 才一

尾上 柴舟

森園 天涙